新花摘

全

E 32
188

新花摘　全

E 32/188.
A00 6559
東京帝國大學圖書印
B 23475

新花摘

灌佛やもとより腹はかりのやど

卯月八日死んで生るゝ子は佛

更衣身にしら露のはじめかな

ころもがへ母なん藤原氏なりけり

ほとゝぎす歌よむ遊女聞ゆなり

耳うとき父入道よほとゝぎす

小原女の五人揃うてあはせ哉

更衣矢瀬の里人ゆかしさよ

金の扇にうの花画たるに句せよと望まれて

白金の花さく井手の垣根かな
うの花とさくや井手の里
うの花やきふねの神女の練の袖
をちこちに瀧の音聞くわか葉かな
山畑を小雨晴れゆくわか葉かな
般若よむ庄司が宿の若葉かな
夜泊りの帆の有明てわかばかな
筍や五助畠の麦の中
葉ざくらや草鹿作る兵等
短夜や八聲の鳥は八つに啼
日光の土にも彫れる牡丹かな

陸軍軍醫學校

みじか夜や葛城山の朝ぐもり
夏山や神の名はいさ白幣（シラニキテ）
蹇の三絆ゆるやうつゝり
闘越るいきり車やかたつふり
少年の矢數問寄る念者ぶり
ほのぼのと粥にあけゆく矢數かな
若楓矢數の籌とこちきえ
大矢數弓師親子もまゐりたる
葉ざくらや奈良に二日の泊客
麥秋や鼬なくなる長がもと
麦秋や遊行の棺とほりけり

陸軍軍醫學校

朝比奈が曾我を訪ふ日や初鰹
麦秋や狐ののかぬ小百姓
麦の秋淋しき顔の狂女
麦刈て瓜の花まつ小家かな
初鰹観世太夫が端居かな
殿原の名古屋皃なる鵜河かな
たかとして拂ふ夏書の机かな
ねり供養まつり皃なる小家かな
浘桐の花ちる里となりにけり
ほうふりの水や長沙の裏借家
不動画く琢摩の庭の牡丹哉

陸軍軍醫學校

袖笠に毛虫をしのぶ古御達
討はたす梵論つれ立つ夏野かな
柚の花やゆかしき母屋の乾隅
筍や垣のあなたの不動堂
播やいらしやうの弓矢所
谷路行く人は小さき若葉かな
皃白き子のうれしさよ枕蚊帳
床ひくき旅のやどりや五月雨
若竹や十日の雨の夜明がら
金屏のかくやくとして牡丹かな
南蘋を牡丹の客や福西寺

陸軍軍醫學校

ほくたんや白うの猫こゝの際
牡丹ある寺行き過ぎし恨かな
やゝ二十日月も見行く牡丹哉
山蟻のあからさま也志ろ牡丹
方百里雨雲よせぬ牡丹かな
詠物の詩を口をさむ牡丹哉
山蟻の覆道つくる牡丹かな
草の戸はよき蚊帳たる法汲かな
木かくれて名誉の家の幟かな
柚の花や能酒藏を二角の内
淺河の西し東を二の葉かな

陸軍軍醫學校

夏山や京盡し飛ぶ鷺ひとつ
讀ト先生木下闇の訪はれ貞
栃の花きのふ散りし黄こ見ゆ
口なしの花さく方や日よりとき
ごつしと僧都の咳や閑古鳥
掘食ふ我たうんなの細き脛
笋を五本くれたる翁かな
麻を刈れと夕日この頃斜なく
藻の花や小舟よせたる門の前
閑古鳥いさゝか白き鳥飛びぬ
辻まよ死きる人あり麦の秋

陸軍軍醫學校

三井寺や日は午にせまる若楓
朝風の毛を吹見ゆる毛虫かな
我水に隣家の桃の毛虫かな
鮓つけて軈ていにたる魚屋かな
鮒すしや彦根の城に雲かゝる
鮓壓して志ばし淋きこゝろかな
朝風に毛を吹かれ居る毛虫かな
鮓を壓す我酒醸す隣あり
寿し桶を洗へは浅き遊魚かな
眞志らけの米一升や鮓のめし
卓上の鮓に目寒し觀魚亭

陸軍軍醫學校

若楓學匠ふミに目をさられ
鮓の石に五更の鐘の響かな
寂寞と晝間を鮓のなれ加減
藥園に雨ふる五月五日かな
巫女町によき絹すます卯月哉
一八や志やう父に似て志やみ花
うけほりのうれ住けれ今
箙たく矢花の空をほとゝきす
家ふりて幟見せたる翠微かな
めなけとる小舟に砂はなかりけり
酒を煮る家の女房ちよとほれた

陸軍軍醫學校

魚赤なのふたる人の七回忌追福の為めよ
まれるとちの発句をもて手向草と
なさも則讃佛場の目なるべし

梢より放つ後光や志ゆろの花

青梅の微雨の中ゆく飯烟

米候一周忌

かうしさよ志きミ花さく雨の中

芍薬よ紙魚うち拂ふ窓の前

右題學寮

青梅やさてこそ志らぬ豊後橋

若竹や是非となけなき芦の中

春草　春草綿ミ不可名水辺原上乱
抽榮似嫌車馬繁華地纔入城門
便不生　右劉原甫

蟻
蟻垤

王宮朱門を開く牡丹哉

五月雨や田ごとの闇となりにけり

右の句ハ去年の夏いひおきてたる句也而池月
庵の日記にも書とゞめたるべし　あへて好き句
とおもふにはあらねど聊仔細あれバかいつけ
侍るなり

浮草も沈むはうりよ五月雨

陸軍軍醫學校

ちるの道や水ふミちたる五月雨
五月雨や鳥羽の径を人の行
五月雨に見えずなりぬ径ハ
五月雨や滄海を衝く濁水
五月雨や水に銭ふむ渡舟
濁江に鵜の玉の緒や五月雨
摂津の一ゐはだし詣りや五月雨
五月雨や鵜さへ見えなき淀柱
五月雨やきみねの社灯消す時
小田原で合羽買たり五月雨
閼伽棚に何の花そも五月雨

陸軍軍醫學校

葉を落て火串に蛭の点す音
宿近く火串もみけぬ雨の漂
射干て呼く近江やけふハ
雨やそも火串に白き花見す
　葉うらし
兄弟のきつを中よき火串ハ
あら波で小舟慄む五月雨
水古き深田に苗のみどりハ
けふはとて娘も出立つ田植ハ
ゆりのけの伯母もれつ田植ハ
獺の住む水も田に引く早苗かな

陸軍軍醫學校

参河なる八橋も近き田植かな
此日より所労のためによろづ怠りがちなん
發句など案ぜざりしかバねざめいくつも
いたづらに過し侍る
五月雨の大井越たるかしこさよ
午の貝田歌音なくなりにけり
獺を打し翁も誘ふ田植かな
五月雨の堀たのもしき田植かな
鯰得て帰る田植のをとこかな
葉ざくらの下陰たどる田草取
早乙女やつげの小櫛もさして來し

陸軍軍醫學校

五元集は角が自撰にして固より自筆に浄写
して剞劂氏に与へ世に廣くせんと校もひとり
たるものなれど文格の法も疑なかるべしさるを
其集も閲たる人の解しかぬる句のみにて
よしと思ふ句はまれ也それが中に世に膾炙
せるはいづれもやすらかにしてきこゆる句也されば
作者の心にこれは妙なりし得たり抔うちほのめ
くといとむつかしく聞え難き暗夜に錦着た
らん類にて無益の集なるべし
家々の句集を見るに多く後に出たるものなり
ひとり五元集のみ現在に出せるなり 發句集出さ

陸軍軍醫學校

されどもあれ抜覚中句集出る後凡て日來の声誉を減ずるものなり去峰集麦林集抔も顔なき心地をらる況近々の輩を論ぜべくもあらんよき句とりふりのを極て得難きものなり其角を俳中の李青蓮と呼ばれたる者也それだに百千の句の中めでたしと聞ゆるは二十句に足らず覚中其角が句集を聞え難き句多けれども讀むたびにあらざ覚中是れ角が優れる處なり兎角句を磊落なるを善しとすべし

麦林集などは好き句もあれど讀みもて行く中躯て厭はしき心地せらる

五元集を其角が現世に出さんと謀りたるものにて自ら精撰して切灰汁打紙の艶やかなるに自ら浄書し躯て木に上すべき程になりて世を逝り本意遂げざりしを其神明の社僧某其遺書を秘め収め持ちて世にも出さざりけるを我友百万坊旨原とりふものの貴き價をつのりとかく賺しこしらへて其書を譲得たり切余に謀りて毫厘も違はぜ此書を写し得させよといふことを容易く諾ひて未だ業も始めざりける程に聊故ありて余は江戸を退きて下総結城の丁宅が許に主人として日夜俳諧に遊び邂逅にして柳居が筑波詣に逢てこゝかしこに席を重ね

或は渾北と上野に同行して處々に宿を共にし松嶋の
浦傳ひて好風に面を拂ひ外の濱の旅寢に合浦
の玉のうへるさを忘れとさまかうさまにして既に三
とせあまりの星霜を経ぬされば彼百萬いつぞ我帰
江を待べき躬て亀成とりかのに謄写せしめ木に彫り
て遂に世に披露せり即今の世に行はるゝ五元集
是也原本と引あはせ見るに聊秋毫の違ひもあらず
よく其角が手澤を失はざる者也其原本今又海
友玉峨が家に収め持てり
此句と平句とのへだたりを心得ること第一の修
行也忽に思ひ取るべからず

鍋提て淀の小橋を雪の人
右は蕪村が句平句の姿なれども発句になるゝ
近江のや手のひら程な雲起る
右は雪中が句也発句に似たる平句也
丸山主水が画きたる蝦夷の図に
昆布で葺軒の雫や五月雨
或人咸陽宮の釘隠なりとて短剣の鍔に物数奇して
腰に放たざりきぞ興じけりいづれも金銀銅鉄にて花鳥
を鏤めたる古物にて千歳の古めかしきものなりされ
ど何を証として咸宮の釘隠といへるか荒唐の沙汰也
中々に咸陽宮の釘隠と云はゞめでたき物なるを

陸軍軍醫學校
陸軍軍醫學校

無念の事ニ覺ゆ
長良の橋杭井出の干蛙と今の世の人持傳へたら
ましかばあさ猿く覺束なき事ニ人の嘲ニ侍らむ
常盤潭北の所持したる高麗の茶碗ハ義士大高源
五が秘藏したるものニて即源五より傳へて又余ニ讓
りたり其ニ伝來着き物ニて侍れど何を証とかなす
べき後ニは彼咸陽の釘隱の類なれど駭て人ニ
打ちくれたり
松嶋の天麟院又瑞巖寺と甍を並べて尊き大禪
刹也余其寺ニ參たりける時長老古き板の尺余計
なるを余ニ与へて曰く仙台の太守中將何某殿はさ

うなき歌よみニて有はしき多くの人夫して名取川
の水底を浚せ兎角して埋木を掘求めて料紙硯
の箱ともの(し)それニ宮城野の萩の軸つけたる筆
を添て二條家へ參らせられたりこれは其板の餘
ニて朧氣ならぬもの也とてたびぬ槻の理のよく
あさやかなる水底ニ千歳を經たるものなれば色黒く
真かねを伸べしやうニ叩けばくわんしと音を
重さ十斤ばかりもあらんそれをひら包して肩ニ
ひしと負ひつゝも辛うして白石の驛まで持出た
り長途の疲堪がたくもあらねば其夜宿りたる
旅宿のものこの下ニ押遣りて退出ぬ其後程經

陸軍軍醫學校

て結城の丁宕が許にて潭北に語りければ潭北
腹悪く余を罵て曰くやよさばかりの珍物打棄
て置きたるむくつけ法師よ其物我得てん人や
あるたゞ往けと須賀川の晋流が許に先づ
遣りたり晋流文を添て其人に教へて白石の
旅舎を尋ねいつ〳〵法師の宿りたるが某
の物忘れ置けりそれ求めに退出ぬと言はせければ
驛亭の主人賢く捜得て与へければ得て帰りぬ後
丁宕伝へて魚鶴といへる硯の蓋にも持てり結
城より白石迄も七十里餘ありて殊に日数も
隔りぬるに得て帰りたる希有の事也

淡々は等閑の筆には非ず昔余蓮翁晋子
雪中を一幅の絹に画きて賛を求めければ淡々
もゝちどり稲負鳥呼子とり
三俳仙の賛は古今淡々一人と云べし今しもつ總日
光の珠明といへるものゝ家に収められたり
結城の丈羽別業を構へて一人の老翁をして常
に守らせけり市中乍らも木々わびかさゝ草茂りて
いさゝか世塵を避くる便好ければ余も暫く其所に
舎りしけり翁は洒掃の外なす業もなければ
孤灯の下に念珠爪繰りて秋の夜の長きをかこち余
は奥の一間にありて句を錬り詩をうめき居けるが

疲て困じはたれば蒲團引被りてとろ〳〵と眠らん
とする程に廣椽の方の雨戸をどし〳〵どし〳〵と叩
く約するに二中三十ばかり連ね打つ音せいと怪く
胸ときめきけれどさ〳〵と起出てやをら雨戸を開
き見るに目に遮るものなし又寢ね伏どに入りて
眠らんとするに始の如くどし〳〵と叩く又起出て見
るに物の影だになし いと〳〵ねたましけれ
ば翁に告げていかゞはせん採語りけるに翁ご
さんなれ狸の所為也又來り打つ時そこは速に
戸を開て逐打つべし翁も脊戸の方より廻り
てくね垣の本に隱れ居て待べしと箠引そば

陸軍軍醫學校

めて伺居たり余も狸寢入して待程に又どし〳〵
と叩くあはやと戸を開けば翁もやゝとみる
かけて出合けるに絶て物なければ翁打腹立て
隈々殘る方なく狩求むるに影だに見えず
かくせること連夜五日計に及びければ心疲
て今は住得べくもあらず覺えけるに丈羽が
家の私臣なるもの來りて云其物今宵は
參るべからず此曉藪下と云處にて里人狸
の老たるを打得たり想ふに此程悪く讐
し奉りたるは疑ふべくもなく去やつが所為也
今宵はいをやすくねよと採語る果して

陸軍軍醫學校

其夜より音なくなりけり憎しと社思へ此程旅の佗寝の淋きを訪寄りたる彼の心のいと哀に苟且ならぬ契にや採打歎かるされば善空坊といへる道心者をかたらひ布施取らせて一夜念仏して彼が菩提を弔ひ侍めり

秋のくれ佛に化る狸かな

狸の戸にたゝくとあるは尾にて叩くと人いふめれどさるは非ぞ戸に背を打付くる音なり

昔丹後宮津の見性寺といへるに三とせ餘宿居にけり秋の初よりわづらひの為に苦しきこと五十日計奥の一間はいと廣き坐敷にて常に障子ひしと鎖して風の通ふ隙だになく其次の一間に病床を構へ隔の襖を立切りてありける或夜四更計なるに病稍間ありければ厠に行かむと思ひてふらめき起たり厠は奥の間のくれ縁を廻りて乾の隅にあり灯火も消えていたく暗きに隔の襖押明けて先づ右の足を一歩さし入ければ何やらむむく〳〵と毛の生ひたるものを踏当てたりねとろ〳〵しければ跪て足を引き〻そばめて伺居

陸軍軍醫學校
陸軍軍醫學校

たりけるに物の音もせず怪くおどろ／＼しけ
れど胸打ち心定めて此度は左の足をもて
みなんと思ひてはたと蹴たりされどつゆ
さはるものなし愈々心得ず身の毛立ちけれ
ばとなく／＼庫裡なる方へ立超え法
師主もべ杯のいたく寝こちたるを打驚
してかく／＼と語れば皆起出つ灯火許多照
して奥の間に行て見るに襖障子は常の
如く鎖しありて外へ逃るべき隙もなく固より怪
き物の影だに見えねば皆云ふこともの病に
侵されてまさなくそゞろ言言ふなりと

怒り腹立ちつゝ皆伏たり中々にあらぬ事言
出でなどするとおもなくて我も臥床に入ぬ
跪て眠らむとするに胸の上盤石を載せ
たらん様に覚えて唯ぐ唸きに唸きけり
其声聞えけるにや住侶竹渓師いりれは
してあな浅猿しこは何ぞと扶起したり
稍々人心地付きてかくと語りければさる事
社あなれ彼狸沙彌が所為也とて戸押
開き見るに夜白々と明けてあからさまに
認めけるに縁より簀の子のしたゝかに續き
きて梅の花の打散りたる様に迹付きたり

扨こそ先に漫言云ひたりとて罵りたる物共
さゝんありけるを嘲りあへり竹溪師はあそ
やと急ぎ出玉ひけるや帯も結びあへず衣
打披きつゝふくらかなる睾丸の米嚢の
如きに白き毛種々と生ひふさりてまゐ
やうとのゝありとも見えざ若きより痒
の病ありとて只睾丸を引伸して捻り掻
きてれはさ其有様いと怪く彼朱鶴長
老の聖繪まうこたるにやといと恐ろしく
心畳ミられければ竹溪師打笑ひて

秋ふるや楠八畳の金閣寺　竹溪

常陸國下館と云處に中村兵左衛門といへる
有古夜半亭の門人にて俳諧を好ミ風
篁と呼ぶ雙なき福者にて家居つき
しく方二町斗に構へ前栽後園に小奇石
異木を集め泉を引き鳥を放ち仮山の
致景自然の眺を尽せり國の守も折々入れ
はして又なき長者にてあり兒妻ちれ満
と云て藤井某と云へる大賈の女にて和歌
の道糸竹の技にも疎からざる心ざまいうに
やさしき女にぞありさばかりの豪族なり
けるがいつしか家衰へよろづ物淋く立入る

陸軍軍醫學校
陸軍軍醫學校

陸軍軍醫學校

人も自ら疎々敷なりぬ其家のかく衰へんと
する始色々の物怪多かりけりそれが中に
いとし身毛立ちて恐しきは一とせ師走
春待料に餅いつしよりも多くねりて大
なる桶にいくらともなく収置ぬ其餅
夜毎に減行きければ何者の盗去けるにや
と伺ひつゝ桶毎に門扉の如き板を覆て
其上に志たゝかなる盤石を載置たりつと
めての朝心憎くて打開き見るに覆を
其儘にて有つる餅は半過減失せたり
其頃主人の風篁を公の事にあつかりて

江府にありけりされば妻の於満やかにあや
のに家を守りて参仕する身の迹にも情深
く慈悲心ありけれハ人皆いと惜しと涙打
翻るあり或夜春の設にいつくしき衣裁縫ひ
て有けるが夜いたく更にたれハ家子共も
皆許して眠らせたり我一人一間に引籠り
隈なくかゝしともし中何ふべき隙もなくし
て灯火明にかゝげつゝ心静に物縫ひてあ
りけり漏刻声志たゝりやゝ午満なる
んと思ふ折節老さらぼひたる狐の中
らしと尾を引て五つ六つ打連れ立て

陸軍軍醫學校

膝の元を過行回より裏戸障子堅く禁
めあれバ聊の虚白たまあるねたいつくより
鑽入るべきいと怪くて目をれとせんすれり
居たるに廣野杯の碍るものなき処を
ゆきかふさまにて舷て掻消ちが如く出さり
ぬれ満ちさまで驚きぬれども覚えず始
のめ如く物縫ひてありけりとぞ翌日彼家に
訪ひていあるや主人の帰り玉ふことの遅く
て御心憂く覚さむ杯と慰めけるに
ぬれ満いつ〳〵よりも顔はせ美くのとやあるに
物打語りよ〳〵かく〳〵の怪異ありきと告ぐ

陸軍軍醫學校

聞くさへ衿寒く擦寄りてあな浅猿しさば
ありの不思議あるをいかに家子共ちを驚
し玉はん一人などか堪ゆべき似げなくも剛
これはいかによと云へばいやとよつゆ恐しと
も覚えず侍りけりと語聞ゆ日比き窓打
雨荻吹く風の音だに恐しと引被きねたる
其なるに其夜のことさとも覚さざりけると
か いとし不思議なる事也
又晋我門人似我といふ翁有けり一夜風篁が許
に宿りて書院に寝たり長月十八日の夜なり
けり月清く露冷にて前栽の千艸に虫のなく

陸軍軍醫學校

抔殊に遣方なくて雨戸は打開きつ障子の
み引立て臥たり四更斗に端なく枕指て
見やりたるに月朗明にして宛も白晝の如
くなるにあまたの狐ふさしとしたる尾を
掉立てゝ廣椽の上に並居たり其影あ
りしと障子に映りて恐ろしなんど小斗
なし晋我も今をえぞ堪ふべき厨の方へ
たゞ走りに走り出でつ主人の臥たる居間
ならんと覚しき處を打叩きてくわし
起出玉へと声の限どよミたれば下部等目
覚まして才は賊の入りたるはと罵噪ぐ

陸軍軍醫學校

其物音に晋我も心定まり眼打開き見れバ厠
のことを打叩きて主人疾く起て扶たばせと
どよミ居たゆるぞありけり我ながらいと
浅猿かりけりと後物語けり
又白河の城主松本大和守殿の家士に秋
本五兵衛といへる撃劔者ありけり聊主君の旨
に背くことありて仕を致し国を去りて名
を醉月と改め俳諧を好み野総の際を
歴遊してこゝかしこの豪族に交り漂萍飛
蓬の如く住處を定めず真に風流の翁な
りけり此翁も風皇が家の奥の間に臥居

陸軍軍醫學校

なりけるに廣椽の下にて老媼の三人斗集ひたるけはひにて頻りにつぶやく声を何事を語るにやと耳欹て覗居たるに一つも聞留むべきこともなし浅猿の迹の只彼いたく更行につけて浅猿く悲く思それて夜明るまでも寝ねだもありしとぞ

得たきものの強ても得るがぬし見たきものを強ても見るが好し 又重て見べく得べき折しこそ等閑に過すべからず重てなし意遂ることは極て難きものなり 梅津半右衛門尉は或家の股肱にて退速の役にも絶倫の働ありて感状を賜り名誉の家也されバ棒俸禄も一万石を領して彼家の元老にて有けり俳諧を好み三ヾ公務の暇其角が門に遊びて其雫と云り角が集にも句多き人也この人武府在勤の事畢て本国秋田に帰らんとき角と別離せることを悲み角を将て行んとせど角従ふこと能はざ角が門人紫紅といへるあり俳諧老達の者なれバ角勧めて其雫に陪従して秋田に下らしめたりされば其雫と角と書信絶ることなかりありとてそれが中にめでたき文章の角が

陸軍軍醫學校
陸軍軍醫學校

文有起居宮暇学問ふくさは素よりなり次は
折柄の書句二三章かいつけさて其次の節は
曰ふび何月某日ハ義士四十七士式家
の館を夜討して亡君の恨を酬いねんなり
社泉岳寺へ引取たれ子葉春帆探殊に比
類なき働有たり彼両士も此日來我凡
辺に馴て風流の壮士なれぞとさて意
氣感慨に堪へずも探書付たり真に貴き
文也とて其栗さうなく秘藏せられたり
其比深見新太郎といふあり何晏董賢と
恥べき程の美童也けり其栗氏少年を憐

陸軍軍醫學校

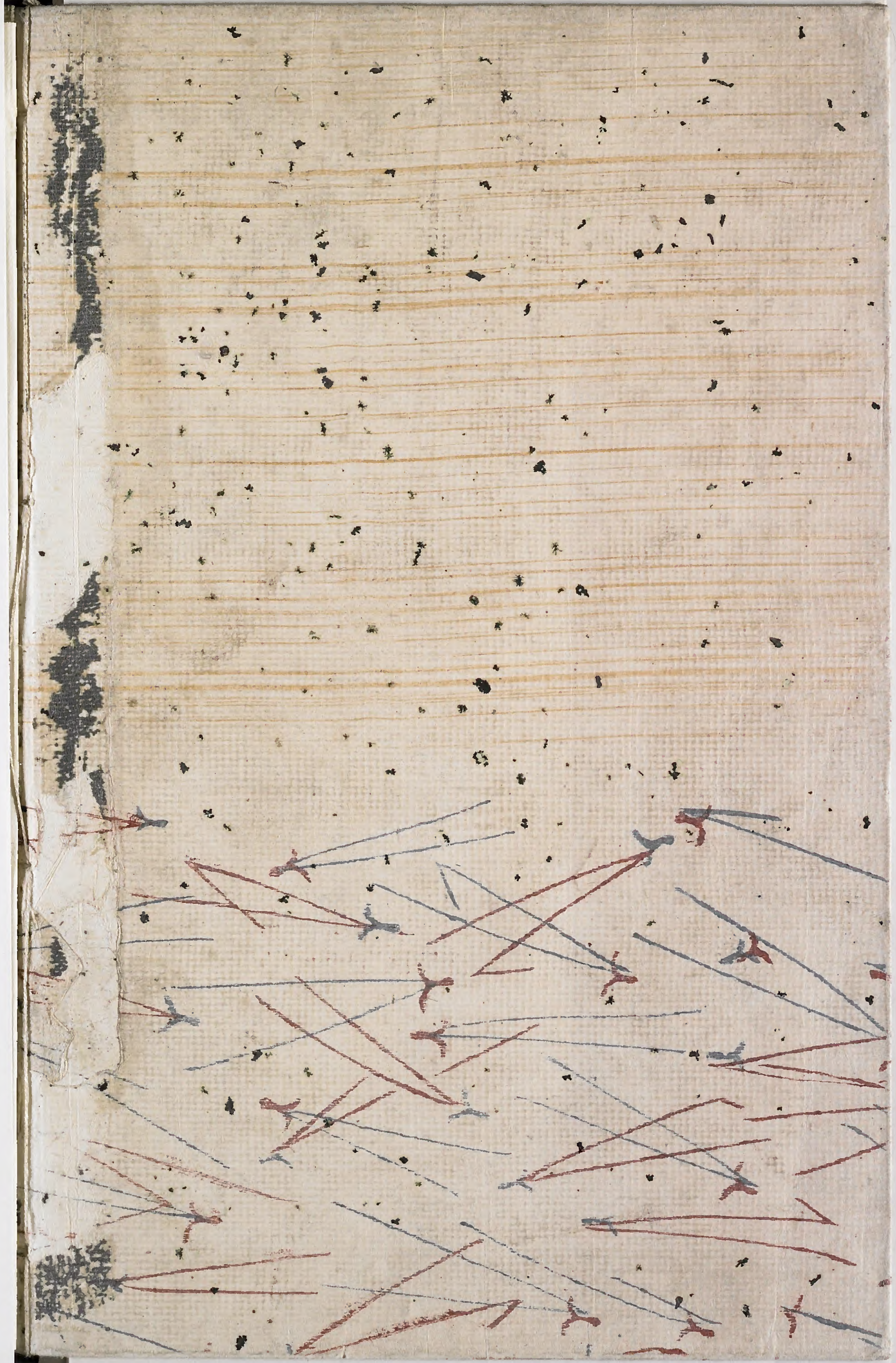
こと蘇李の契深かりけり此新太郎俳諧をも
きて丈草と云り彼角が文字得まく思ひ
て口にさえ言ひも出さでありしを其栗
其心を悟り駈て其文を得させたり其後
年經て沽さが妙子に麦天と云けり浪
速より秋田に行て暫く寓居せり丈草
麦天が俳諧に心酔して又其文字麦天に
譲りたりそれより麦天東都に來り柳原
とりふ貝部の地に怪き宿をもとめて住けり
固より貧くて衣食に給せる便も盡き
相識人もなければ頼寄るべきよすがもなくて

陸軍軍醫學校

ゆり一字余巻ありし時冊志を運びて轍
軒の亭々扶け兎角して月並の俳席に
誘ひ西に東に奔走して鼓吹しければ巴人
吏登寥和午寂杯を始として誰彼集
ける程に後々は草庵に翻る斗並居て
めでたき俳席となれり夫々意遂げ
づき折字得て號て默齋青峨が門に偏
して名字渭北と改め万句の式事も恙なく
文臺のあるじとなれり自ら作家の名高く
諸侯の門にも出入て殊に時めきたりされど
渭北故人恋々の情を謝さんがために右の

角が文字を余に譲らんと云余曰子が家長
物なし只此文字を以て青氈とせいつで
たびなん無厭の事也とくひたたず辞
して受ざりけり其後余ハ東字去り渭
北を故人となれり 其文今誰家に収め
たるにやと心憎きことなり

右ハ先師夜半翁自書也云々
天明甲辰夏佛生日
月溪誌

陸軍軍醫學校
陸軍軍醫學校

陸軍軍醫學校